

解釈せずにはいられない —アメリカの詩や小説—

山野 敬士（日本語・日本文学専攻 教授）



今回の報告では、文学作品の解釈の方法について、講義「米文学史」での実践を基に考えてみる。

[1] 言語・読む行為・意味という病 — 解釈と文学の優位性について

乱暴な私論だが、「細かく」「丁寧に」「書かれていないことも含め」作品の内容を推測、分析、解釈するのであれば、その作品はすべて文学と呼べるのではないだろうか。逆に言うと、優れた文学作品でも、読者が字面だけを追うような読み方に終始すると、それは決して文学足りえないだろう。

言語は「事実を伝達する」ことと同様に、当然だが「虚偽・嘘を伝える」ことが可能である。言語のこの二重性こそが、「字義通りの意味の外部を探る—つまり解釈（interpret）する」ことを我々に要求するのだ。

そのような「言語の牢獄・制限」の中で生きる私たちは、必然的に「解釈の誘惑」や「意味づけ」から逃れることができない。そして、それはもはや「病」と表現すべき位相にある。例えば18世紀の性倒錯の巨人マルキ・ド・サドは長期の投獄中に、妻との膨大な手紙のやり取りを通じ、「手紙の中に脱獄に通じる暗号が隠されている」という妄想を抱く。つまり彼は「意味という病」に罹患していたのである。

サドに妄想癖があることは明白だが、言語を使用する限り、すべての人間が、程度の差はあれ、サド同様にこの「意味という病」から逃れることはできない。つまり原因は、サド個人ではなく「虚偽を伝える」言語の性質にあるのだ。

『現代思想：読むことの現在』（2024年9月号）の中で、宮崎裕助と石岡良治が「読むことを避けてしまう時代で、それでも本を読むということ」というタイトルで対談しているが、「現代の読む行為」は「不要なもの（ノイズ）を消去し、情報を認識するだけ」と批判的に語っていることが印象的だった。情報を正確に読み取るだけの「事実追究主義」は、タイプ偏重に後押しされ、解釈行為を衰退

させ、当然であるが「事実ではなく、ノイズが不可欠な」文学を軽んじる。事実追究主義者に対し「事実がすべて真実だと思うなよ」と述べたい。「事実ではないが真実」であるものは数多く存在するし、「事実でないものにこそ真実がある」と宣言したくなる。

「事実を言語は伝達する」という定義に準拠する言説は「虚偽を伝える」という言語のもう一つの側面に、足元を必ずすくわれる。逆説的に、虚構であることを前提に持つ文学は、倫理的で、強度の高い言語形態であり、その価値や強度は「解釈する」意思や行為により高められるのである。

ここで、「世界最小の文学」と呼ばれるものを見てみる。作者は不詳である。“For sale, baby shoes, never worn.” ガレッジセールの品物紹介と思われるこの6単語をタイプ重視のZ世代でさえも、字義通りに読む人間など存在しないと信じたい。「売ります。赤ちゃんの靴。未使用」の行間（一行しかないが）を解釈することで、我らは胸が苦しくなるような切なさを覚えるのである。

[Ⅱ] 文学解釈の実践例 別府大学 国際言語・文化学科 【米文学史】

(1) “Stopping by Woods on a Snowy Evening” (1922)

ここからは、発表者が本学国際言語・文化学科の「米文学史」（驚愕的に古い名称である）で実践している解釈方法の一例を示していくこととする。

最初に、非常に有名な詩－アメリカの国民的詩人口バート・フロストによる“Stopping by Woods on a Snowy Evening”－を考察する。

Whose woods these are I think I know.
His house is in the village though;
He will not see me stopping here
To watch his woods fill up with snow.

My little horse must think it queer
To stop without a farmhouse near
Between the woods and frozen lake
The darkest evening of the year.

He gives his harness bells a shake
To ask if there is some mistake.
The only other sound's the sweep

Of easy wind and downy flake.

The woods are lovely, dark and deep,
But I have promises to keep,
And miles to go before I sleep,
And miles to go before I sleep.

フロストの詩は、ニュー・イングランドの自然の描写が多いが、冬の森を描いたこの詩にもその要素が顕著である。何より、その「自然の美しさ」が、詞の「音の美しさ」に強化されていることが重要であろう。一行目には倒置(inversion)が用いられる。本来なら“I think I know whose woods these are”とすべきところをknowとthoughに脚韻(rhyme)を踏ませるため“whose woods these are I think I know”と語順を変えている。しかも後者の方が圧倒的に美しい音調とリズムを醸している。

最後のスタンザも、音の美しさが顕著だ。頭韻(alliteration)を踏む“dark and deep”から、“And miles to go before I sleep”のリフレインにいたる流れは、音調も描写内容も完璧に美しい。

フロストこの詩が世に出たのは1922年だが、その2年前にジークムント・フロイトは『快感原則の彼岸』を発表した。その論において、彼は「人間の無意識には二つの本能的な願望・欲望があり、一つは、生きる願望、性愛の願望である『エロス』であり、もう一つは、エロスと対照的な本能—無機質で静止した状態に回帰したいという、死の願望や本能である—『タナトス』である」という思弁を述べた。

文学作品などで古くから使用されてきたイメージやシンボルを収集・整理した『イメージ・シンボル事典』の定義に従えば、フロストがこの詩で用いた森や湖や雪は、「無意識」や「生と死の循環」といった、フロイトの思弁と合致するイメージやシンボルとして機能している。特に、森と無意識というのは、歴史的に連想されてきた組み合わせである。

つまり“Stopping”の主人公(語り手)は、森の中で自らの無意識に深く潜り、死の本能(タナトス)に襲われたが、「まだ何マイルも進まなければいけない」と、生の本能(エロス)をつかみ取った、と解釈することが可能となるのだ。最後のスタンザはエロスとタナトスのそのような葛藤をgoとsleepを並置して詞的に表現していると言える。

だとすれば、倒置で読者の注意をひいた1行目も印象的だ。森が無意識の象徴

ならば「この森が誰の森かたぶん私は知っている」という発言は、意識が垣間見る無意識の輪郭を巧みにとらえている。つまり、無意識とは、私たちにとって「知ってると思う」的なものなのである。

フロスト自身はこのような解釈を否定したと言われる。常識的にフロストがフロイトから着想を得たとも考えにくい。しかし、この詩と論文が近い年代に書かれたこと、しかもそれが第一次世界大戦の数年後だったことを考慮に入れば、そこには「時代の心性（死の不安）」の存在が窺えるだろう。

また、余りにも思弁的なフロイト理論に、フロストの詩は具体的感覚を付加しているとも言える。逆に、フロストの詩が描くように、年齢を重ねるにつれ「自然の雄大さや静けさの中で」「ああこのまま死んでしまいたい」などいう不思議な感覚をうかつにも持つことが人間にはある。その感覚に論理性を与えたのがフロイトのタナトスの概念なのだ。つまり二つの著作は補完しあう存在なのだ。

(2) *The Scarlet Letter* (1850) 『緋文字』

続いて、ナサニエル・ホーソンの*The Scarlet Letter*について考えてみたい。米文学の源流として評価の高い小説だが、何より登場人物の造形が秀逸で、特に主人公のヘスター・プリンは「ファーストネームだけで、その人物を指す米文学史上最初の登場人物」と言えるだろう。

ヘスターは夫がいながら別の男性と関係を持ち、女兒を出産する。舞台は17世紀のピューリタン精神が支配するアメリカ。彼女は村人から激しく非難され、服の胸の部分に、黒字に赤でA（緋色の文字）と刺繍された布を付けるよう命じられる。このAは、姦通(adultery)を表している。反道徳的行為の罪を一生背負う処罰が共同体からなされたのだ。

ヘスターがどんなに詰問されようとその名を言わない姦通の相手は、村の牧師、アーサー・ディムズデルである。自らの罪をヘスターが理解していないような瞬間があるのに対し、牧師の悩みは非常に深く、小説の「罪の主題」はヘスターではなくディムズデルの心理描写に強調されている。彼は結末で自分がヘスターの不義の相手であることを告白し絶命する。

ヘスターの夫は高齢の男である。ロジャー・チリングワースという偽名を名乗り、医者として村に忍び込み、ヘスターの不倫相手を嗅ぎまわり、ヘスターを直接的に、ディムズデルを間接的に追い詰める。牧師の死を見た後、敵を失った失望感からその同年に死亡する。

ヘスターは罵りや誹りの中、娘とともに強く生きる。村のはずれに（森が近い場所）居を構え、裁縫仕事に精を出し、社会奉仕活動にも携わる。村人たちは彼女の罪を引き続き非難しながらも、その存在や人間的価値を認め始め、ついには胸の文字のAもAbleやAngelのAだ、と述べるようになる。村人はAの文字を「解釈」したのだ。

ヘスターは天寿を全うする。彼女の埋葬の場面が小説の結末となる。

And, after many, many years, a new grave was delved, near an old and sunken one, in that burial-ground beside which King's Chapel has since been built. It was near that old and sunken grave, yet with a space between, as if the dust of the two sleepers had no right to mingle. Yet one tomb-stone served for both.

古い、沈み込んだ墓穴の隣にヘスターのための墓穴は掘られる。二つの遺体には交じりあう権利がないかのように、間隔をあけてその穴は掘られるが、墓標は一つでこと足りた、と描写される……ヘスターの隣に眠っているのはディムズデルだろうか？チリングワースなのか？

私は長らくそれがディムズデルだと信じていた。戸籍上の夫婦でないため、「遺体が触れ合う権利はない」が、深い愛情を交わした二人として「一つの墓標」を認められたのだ、と思っていた。しかし、当時の民法などを参照した研究によると、眠っているのはチリングワースでほぼ間違いないとのことである。嫌悪を介した夫婦ではあるが、夫婦の制度を無視できない限り、二人は「一つの墓標」の下に眠ることを強制されるのだ。しかし、「遺体が触れ合う権利」を村人たちは認めたくなかったのだ。

どちらが眠っているかの結論はない。学生の意見も毎年分かれる（チリングワースと考える数が毎年増えているのは意外だが）。重要なことは、いずれにしろ、ヘスターの墓穴を掘った村人たちが「ヘスターに対してやさしい」ということだ。「一つの墓標」と「墓穴の間隔」は、彼らがヘスターの尊厳を肯定し、敬意と愛情をもって葬送したことを象徴しているのである。